

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

このモリイクを作っている今、2022年の3月上旬、とても気分が落ち込んでいて、心配事で心がいっぱい、正直なところ上空で編集作業をしています。

今まさに日本の隣の隣の国でたくさんの人たちが殺し合いに巻き込まれて命を失い、あるいは家族を失い、悲しい思いをしている。そんなことが頭をよぎると、もうとても仕事に集中できる状態ではなく、早くこの事態が治りますように、と祈ることしかできない、どうしようもない無力感と焦燥感に押しつぶされそうになるのです。

つながりの消失、それを分断と呼ぶなら、人間にとって最大の分断は戦争ということになるでしょうか。一方でつながりに溢れて、生も死も日常だけお互いが利用しあい、支えあっているのが森という環境です。それを平和と表現するわけではありませんが、それでも戦争という言葉の対極にある世界観だと思うのです。

今回、取材では「つながり」を生み出す人たちに話を聞きました。それは、たくさん情熱が傾けられて、ひとつ、またひとつと丁寧に違うものたちをつなげていく作業。そして森と人、人と人、価値観の違うものたちをつなぐことの先にあるのは、やっぱり平和という言葉なのだと、今、祈りを込めて思っています。



<https://www.facebook.com/coop.asumori>

モリイク vol.23
2022年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証材およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

M O R I - I K U

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.23
Apr. 2022



森と人をつなぐ輪を

つながり広がり、
転がる未来へと。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

モリイク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 森の輪プロジェクト
ひろがり、つながり、ころがる
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 森のキモイ・キレイ特別編
となりのヒグマとともに生きるために
- *12 木育essay
森はどこにある
- *13 コープ未来の森づくり基金報告
あすもり未来検討委員会
Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *14 未来に伝える森づくり
どんぐりプロジェクト

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

今回の特集で取り上げた「森の輪」は、北海道が発祥の木育から生まれました。木育は以前の「モリイク」でも取り上げましたが、道内の環境教育や木工・林業関係の人たちが知恵を出し合ってスタートしました。木育は「子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取り組みです。子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を

育むこと」とされており、「森の輪」はこの趣旨を体現した取り組みといえます。

北海道の木育の特徴は、北海道が認定する木育普及の専門家である木育マスターがネットワークの力を活かして活動を展開していることです。森林や木材に関わる様々な専門家や事業者が協力することで、より多様で深みのある木育のプログラムを提供し、より広く深く木と関わってもらおうとしています。「森の輪」は地域の

林業・林産業やクラフトに携わっている方をつなぎ、森をめぐる地域・人のつながりを構築しながら進めている点でも木育らしい取り組みといえます。

一方、地域づくりに木育を取り込んでいるところもあります。当麻町では食育・木育・花育をまちづくりの柱としており、この中で木育は産業振興と結びつけながら取り組んでいます。地元産材で建築した「くるみなの木遊館」という拠点施設では、社

会福祉法人が運営に関わって障害者の雇用の場を作りながら、子どもから大人まで木の遊具・木工体験などを楽しむ場となっています。また、町産材で公営住宅や子育て支援センターなどの公共建築を行い、町産材の活用を図りながら町民の町産材活用への関心を高め、さらに町産材による住宅建築への助成を進めています。森林組合は長期的・持続的な森林計画を立て、所有者と協力し合いながら循環型

林業を進めて、町産材活用を支えています。

このほか道南地域では木育マスター道南支部をつくり、様々な専門性をもつマスターが地元の林産企業や、良品計画などと協力して木育活動を展開しています。行政と協力しながら、ワークショップを開催するなどして、子どもから大人までたくさんの方が木に親しみ、木でモノをつくるなどの体験を提供しています。また、良品計画の函館店舗（シエスタハコダテ）は

道南地域の木材を内装・什器などに活用しているほか、木育広場を設け木育マスターが様々なイベントを行っています。

木育は多様な人を結びつけ、地域づくり・まちづくりへと広げられる活動であり、北海道の地で木と社会の新しい関係を切り開きつつあります。◆



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長
1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』（築地書館）。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。



ひろがる、 つながる、 ころがる。

もり わっこ 森の輪プロジェクト が紡ぐストーリー

生まれて初めての 木のおもちゃを贈る

「森の輪プロジェクト」は、自治体が地域
の木で作ったおもちゃを新生児に贈るという
取り組みです。プロジェクトの声かけ人は札
幌大谷大学短期大学部の馬場拓也さん。
「赤ちゃんが初めて触れる木のおもちゃを、
地域の木で」という思いをもとに2019年
はじまり、今では道内を中心に14の自治体
が参加して、さらに広がりを見せる注目のプ
ロジェクトです。

家族で癒されていますよ

生後8ヶ月の新生児検診の時に町からも
らった時には、「へえ、木の歯がためもらえる
んだ、よかった!」くらいに思っていた、と話
すのは、清水町在住の大石絢美さん。清水
町は子育て支援にも力を入れており、その
一環として「森の輪プロジェクト」にも参加
している自治体のひとつです。

手に持たせるとまず口に運ぶ。それから掴
んでいるんなものを叩いて音を聴く。まだ握

力がないので今はそのくらい。今回「森の
輪」を手にした大石さんの長男、理人くんの
遊び方はまだまだシンプルです。ただし、4歳
になるお姉ちゃんはその形がお気に入り
で、ドーナツとかメガネとか、見立て遊びで楽し
んでいるのだとか。「なんで私のはない
の? って言われますよ」と、きょうだいで大
人気。「私も木のものが好きなので、親子で
癒されています」それから、「おもつを換える
時に手に持たせるといじってしてくれるから
楽なんです(笑)」とも。

親子で楽しんでいる「森の輪」はシンプ
ルな木のおもちゃ。大人の手のひらに収まる程
度の木の輪っかだけど、シンプルさゆえに赤
ちゃんは感覚で世界を捉え、子どもはいろん
な発想の中で遊びを膨らませ、大人はその
形と手触りの優しさに癒される。年代によ
って違う楽しみ方ができるので。

「森の輪」は木のおもちゃ。木のものは高
価だから身近には使いづらい。だからプラス
チックのものをわざと使わない。でも、大
石さんは「木のおもちゃは高価だけど、世
代を超えて長く使えることを考えると、本当は

高くないと思います」と話します。お父さん
が赤ちゃんのころに使っていた木のおもちゃ
で楽しそうに遊ぶ子どもたちの姿を見てそ
う感じたのだそう。「子どもたちもプラスチ
ックのものより丁寧に扱っている気がします。
傷がついてもそれが思い出になるし、壊れたら
自分たちで直して、ものを大切にできる気持
ちも伝えるきっかけになります」。年季の入
った木のおもちゃの持つ、ぬくもりや記憶。木
の「もの」と一緒に、世代を超えてつなげたい
思いもあるのでしょうか。

「先日森遊びをしたときも、お姉ちゃんは
木をノコギリで切ったり、木を集めて焚き火
をする遊びをずっとやっていました」と、森や
木への興味も育っているようです。子どもは
五感で育つ。だから自然に触れて、自然の中
でたくさん遊んでほしい。「自然の中には思
い通りにならないこともたくさんありますよ
ね。自分で考えて、自分で決めて、小さな挫
折にも立ち直れるような人に育ててほしいと
思います」。幼い頃に手にした「森の輪」の
記憶は、子どもたちの将来の姿までつな
がり、広がっていくのかもしれない。



大石さんは最近改めて「森の輪」プロジェクトについて、パンフレットや動画を見て手元にある木のおもちゃのことを考えたそうです。「もらったときに町内の木を使ったということしか知らなかった。伐らなきゃいけない木や使い道のない木を使うとか、そういうことを知って、いい取り組みだな、と思いました」と言うように、実は届けたいのはその木の持つ来歴や関わる人をつなぐストーリー。

地域の輪を広げる

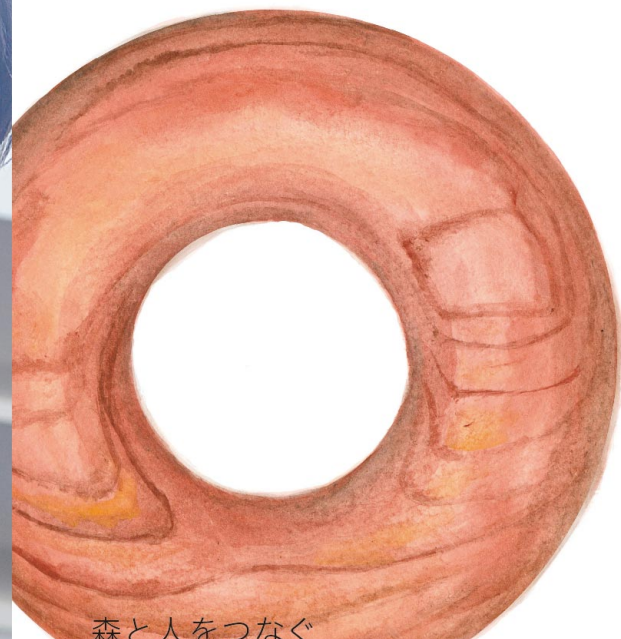
実際に「森の輪」を作るのは各地にいる木材加工所や木工作家の方々。そのうちの一人で苫小牧広域森林組合の松田明仁さんは、むかわ町穂別地区を中心に、地域で人と自然をつなぐ活動を長い間続けてきました。それは例えば炭鉱の衰退にともなって一時期使い道がなくなっていたカラマツを使って木のおもちゃを作り、販売する活動だったり、近隣から子どもたちを呼び寄せて自然体験・農業体験をさせるキャンプを運営したりといったことで、自分の仕事だけでなく、地域のイベントを通じて地域の人たちと自然とのつながりを大切に育ててきたのです。

松田さんは森林組合の職員でもあり、木育マイスターの資格も持っています。だから、「森の輪」の話聞いた時には「いい取り組



みだからやろう」と思ったといいます。ただし、森林組合の事業としてやるのだからその継続性や収益性も大切になる。「1日きりではない、続けることが大切なんだ。一度やめてしまうと全部なくなってしまうから、細くても続けていけば、そのうちまた大きくなる」と、続けるために製作には負担が少なくなるようにするなど、始めるにあたって考えることは多かったそうです。しかし始めてみれば広報にもなるし、近隣の地域から声もかかって、「森の輪」はまわりでも広がりつつあるとのこと。

この活動は松田さんのライフワークでもある木育「自然の中で人と人がつながっていくこと」も表現していて、たとえばこれからは「森の輪」の製作にあたってやすりがけを地域の作業所などに頼むなど、新しいつながりを生み出すきっかけにもなるのではないかと期待しています。「森の輪」が、新しいつながりを地域にもたらしているのです。



森と人をつなぐ

「森の輪プロジェクト」は、大学や行政の関係者のほか、子育て中の母親など立場の違う様々な人たちがつながりあって始まりました。そんなプロジェクトについて、「森や木に関心を持ってもらうには一過性のイベントだけでなく地域で継続的な取り組みができればいい、と考えてたところ馬場先生からアイデアを聞かされて、ぜひ一緒にやろう、と思ったんです」と話すのは、北海道石狩振興局の濱田智子さん。プロジェクト立ち上げ人の一人で、道の職員としての立場からもプロジェクトの様々なバックアップをしています。



森とつながることで暮らしや社会がもっと豊かになってほしいと、公私ともに森林に深く関わってきた濱田さんは幼少の頃から森を歩き、森の癒しを受けて育ってきました。だから大学では林学を学び、道庁の林業技術職員として働くことに。また、お子さんたちが小さかった時には同じく子育て中の親子を集めて森での時間を楽しんでいただけたら。ここでも、仕事や子育てに疲れたお母さんたちが癒される姿を目の当たりにしていました。そうしたことが重なって、森と人をつなぐ活動がライフワークとなっていったといいます。

そんな中で「森の輪」については、森と人をつなげる「輪」になることを期待しているとのこと。

木の製品は、伐採・製材・製作・販売など、森からたくさんの人を経て手元に届く。それぞれが分断され、隔たりが大きくて、つながりが見えにくい。農作物のように、生産者の顔が見える、という関係を築くのはなかなか難しいのです。だからこうして日常に触れる木のおもちゃがあって、そこに森と人をつなげるストーリーをセットにすることで、私たちの暮らしと森林との関わりや、木材資源を循環させながら利用する大切さを意識してもらえれば、と話します。

分断ではなく、遠くなってしまった森とのつながりを取り戻したい。「木のおもちゃがきっかけで木や森に関心を持つ人が増え、森がもっと身近になれば、森でつながる新たなコミュニティが各地に育っていくのでは。それは、誰もが心豊かに暮らせる社会につながっていくと思います」と、「森の輪」が育むであろうつながりについて話してくれました。



思わぬ方向に転がる

「森の輪」が、予想外のつながりやひろがりを生んでくれる、と話するのは、帯広の森・はぐくむの日月伸さん。森の輪プロジェクトで事務局を担っています。このプロジェクトの特徴は、「各自治体が主体となって新生児に森の輪を贈る」ということ以外にはあまり決まりがないことです。つまり、とても自由度が高い。

「森の輪」は、形や大きさには赤ちゃんが成長の発達に合わせた遊びができるように設定された決まりがあり、特に安全性についてはプロジェクトが自ら検査するなど、厳しいチェックをしています。ただし、その製作過程やアレンジはそれぞれの自治体に任されていて、例えば上士幌町では「森の輪」に赤ちゃんの名前と生年月日を入れるし、中

標津町では加工の一部や「森の輪」を入れる袋の製作を地元の福祉施設が担っています。使う木材も、地域の学校で大切にされていた木がやむなく伐られたものや、材として使われない木、地域を象徴する木などさまざま。だからプロジェクトに参加する自治体の数だけ、「森の輪」のストーリーがあるといえるのです。日月さんは、「私たちは森とつながっています。今は、何かとつながりが見えづらい世の中ですが、森の輪を通じて自分たちの暮らしが森や産業や身近な自然とつながっていると感じ、それらに目を向けてもらえたらうれしいです」と、話してくれました。また、「どんなストーリーを乗せるかは地域次第。思ってもみなかった活動が生まれるので、そこが楽しいところです」と言うように、予想外のつながりが自由に広がっていくのもこのプロジェクトの特徴。どこに向かって、どこまで転がっていくのかわからないところも魅力のひとつなのかもしれません。

「森の輪」は、実にシンプルな木のおもちゃです。でも、シンプルだからこそ、その背景にあるストーリーの奥深さに思いを馳せ、つながりに想像を膨らませることができるようにも思います。

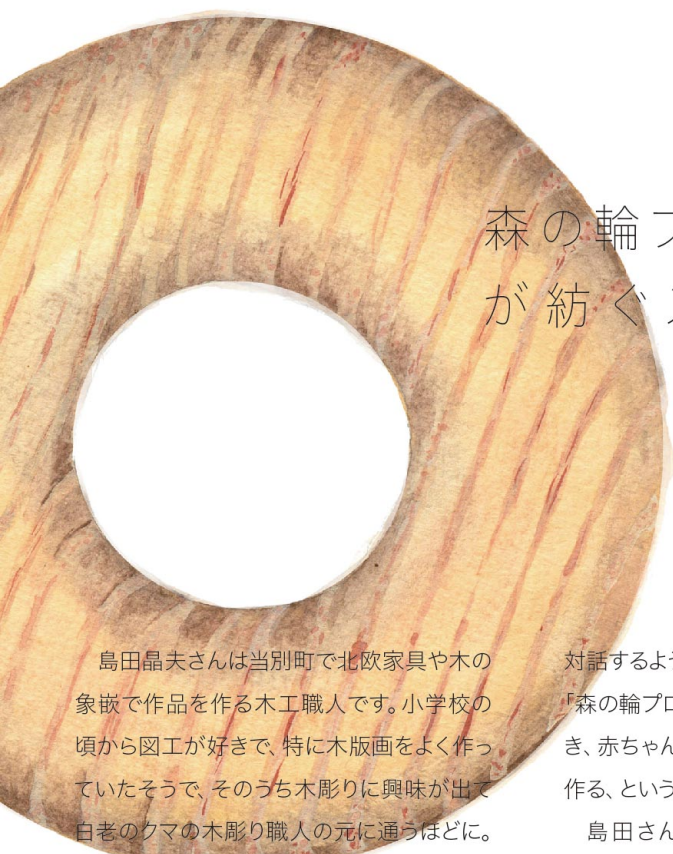
「森の輪プロジェクト」は、さまざまな人がつながりあって生まれている活動で、そこに込められた思いも様々ですが、共通するのが「森と人とのつながりをつくること」。その思いが「森の輪」を受け取った人に届き、森と人をつなぐ「輪」が、きっと未来へと広がっていくのでしょう。🌲



ここまで話してくれた人たち

大石 絢美さん・理人くん（清水町）
松田 明仁さん（苫小牧広域森林組合）
写真提供（7ページ）：森の輪プロジェクト

濱田 智子さん（北海道石狩振興局）
日月 伸さん（帯広の森・はぐくむ）



森の輪プロジェクト が紡ぐストーリー

森の輪を つくる人

島田晶夫さんは当別町で北欧家具や木の象嵌で作品を作る木工職人です。小学校の頃から図工が好きで、特に木版画をよく作っていたそうで、そのうち木彫りに興味が出て白木のクマの木彫り職人の元に通うほどに。さらに音威子府高校に進み、家具の製作を学ぶと、より深い学びを求めて北欧にも足を伸ばしました。そこで北欧家具のデザインに魅せられたといいます。「北欧の家具は定番のデザインなんです。それは、家具は受け継がれる道具だから。親から子へ、子から孫へ。シンプルではなくて質素な定番のデザイン。長く使うもの、という前提があって日本のデザインと考え方が違うんです」と、北欧家具に出会った時の驚きと魅力を話してくれました。

同時に高校の頃から独学で象嵌を始めたといいます。見よう見まね、試行錯誤。だから作り方も独特で、普通は象嵌といえば糸鋸を使って部材を切り出しますが、島田さんはデザインカッターで切り抜きます。一切着色せず木の色や木目の模様をそのまま使い、繊細かつ豊かな世界観を表現します。モチーフは植物が多いそうですが、ほかにも依頼を受けて作るのがペットの肖像。「飼犬の絵を頼まれることもあります。その時には、その犬の写真を部屋中に貼ったりして性格や個性が自分の中に形作られるまでじっくり向き合います」と、並々ならぬエネルギーを注ぎ込むのは、飼主のペットに対する思い入れをちゃんと理解しているから。

製作の対象とはじっくりと、材料の木とは

対話するように、真摯に向き合う島田さんが、「森の輪プロジェクト」から声をかけられたとき、赤ちゃんが最初に触れるおもちゃを木で作る、というところに魅力を感じたのだそう。

島田さんが作るのはヤチダモの「森の輪」。新篠津村で生まれた赤ちゃんに贈られています。ヤチダモは毛羽立ちやすく、トゲが出やすい。だからこのほか仕上げのやすりがけは丁寧に行っているとのこと。今のところプロジェクトに参加して広がった新しいつながりはないけれども、木への興味は尽きないので、実際に伐採したりすることには憧れがあるといいます。また、「自分が作った森の輪



を口に入れて笑った赤ちゃんの写真を見た時はうれしかった。良いものは良い。だから、これからも広がっていくと思うよ」と、今後のプロジェクトの広がりを楽しみにしています。



わずかな道具だけで生み出される象嵌の世界。

かつて森の植生やどんぐりについて調査し、田んぼづくりをして森との関わりを体で体験して「森も山も適材適所」なのだと感じたという島田さん。木の個性をひとつひとつ引き出して描く象嵌の作品や、赤ちゃんが啜えたりにぎったりする様子を思い描きながら一つ一つ大切に作る「森の輪」などの作品は、ご自身のその気づきと木への思いが深く息づいていることを教えてください。

これからは伝統工芸としての象嵌に挑戦したり、次世代へのアウトプットにも力を入れたりしていきたいとのこと。「一生勉強ですよ」と話すその笑顔に、真摯に木と向き合う木工芸家の思いが滲んでいるようでした。✦



島田 晶夫さん 当別町
<https://d-s-shimada.com>

大きな木の 小さな物語

⑱ 北海道のサクラ類

ずいぶん前のこととなります。『北海道樹木図鑑』の著者、佐藤孝夫さんが「自生のサクラでも、樹種を組み合わせたら1ヶ月くらいお花見できるのにねえ」と話していたのを思い出しました。北海道に自生するサクラ類4種、咲く順に並べてみます。

チシマザクラ。高さ3~5mほどの低木性のサクラです。ほぼ全道に分布。札幌では4月末の大型連休前半、サクラ類では最も早く開花します。ピンクが濃いものから白いものまで、花の色は同じ種類とは思えないほど変化に富んでいます。

エゾヤマザクラ。本州の図鑑ではオオヤマザクラと表記されています。北海道でサクラといえば、これでしょう。樹高は20mほどになります。薄紅色の花の色で、同時に臙脂色がかった葉も開きます。本州のソメイヨシノのような桜花爛漫の華やかさはありません。チシマザクラの終盤ころから咲き始め、数日で満開を迎えます。その年の気温によって異なりますが、大型連休後半に満開になることが多いように感じています。

カスミザクラ。高さは15mほどになります。聞き慣れないサクラの仲間かもしれません。ここ数年、カスミザクラを気に留めながら札幌市内を歩いているのですが、けっこう植栽されています。エゾヤマザクラかも、と思ってタネを取ってきて育てた可能性があると考えています。エゾヤマザクラが散ってから1週間から10日ほど経って満開を迎えます。エゾヤマザクラに比べ花の色が白く、ひとつの花芽から3輪咲き、そのうちの1輪は花柄の途中から枝分かれて咲きます。

ミヤマザクラ。札幌付近では最も遅れて咲くサクラです。たぶん公園では植えられていないと思います。5月末末になって森の中で咲いています。

ひと月もの間お花見ができる公園。どこかでつづいてみたいような気がします。✦

参考文献 佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜理西社
伊藤浩司・日野間彰・中井秀樹編著,1994,環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録IV 合併花植物,244pp,たくぎん総合研究所
笠原三郎,2014,青柳庵日記,チシマザクラ 随筆,
<http://blog.sapporo-nyu.com/?eid=744> 2022/02/11
佐竹義輔ほか編著,1993,フィールド版日本の野生植物 木本,219pp,平凡社



カスミザクラ
Cerasus leveilleana



エゾヤマザクラ
Cerasus sargentii

チシマザクラ
Cerasus nipponica var. *kurilensis*



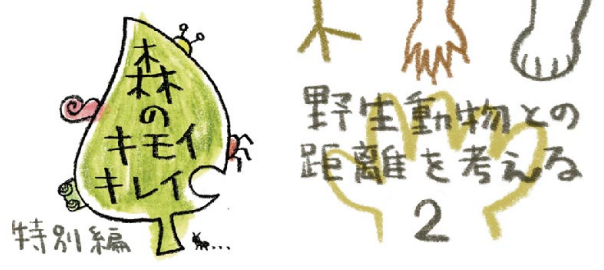
ミヤマザクラ
Cerasus maximowiczii

text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門)；建設環境。著書：アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計；絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—；砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造；浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



お詫言と訂正 前号のハンドレイの記事で、ライラックの原産地について誤った表記がありましたのでお詫言して訂正いたします。ライラックの原産地が「アフガニスタン・ペルシア地方」と書きましたが、これはライラックの中のある種類についてのごことで、私たちが見ているライラックの原産地はヨーロッパ東南部です。



クマの生息地に接した場所では、日頃から、ヒグマと人に安全な暮らし方をすることが大事！

となりのヒグマとともに生きるために

うちの近所には、クマ、いないよね？

いいえ、ヒグマは、裏山や防風林、川の名ば、あなたの暮らしのとなりに必ずいます。人から隠れながら、静かに暮らしています。ヒグマが生息する北海道の自然の豊かさを上手に分け合っ、安全に暮らしていくために、ヒグマとの3つのルールを身につけよう。



クマがいる可能性を常に忘れないで行動しよう。近所の野山へのハイキングや、山菜採り、家の裏で畑仕事をする時。

なるべく複数人で山に入ろう。複数で行動している人を、ヒグマが襲った事故の例はこれまでありません。



山に入る時は「これから行くよ！」と、クマに知らせよう。声をかけたり拍手をしたり。クマが隠れることができるように！

基本装備
クマ鈴、ラジオ、クマよけ笛、クマ撃退スプレー

周囲の様子に常に気を配ろう。
音 ガサッという音、鳥の声など
跡 足あと、食べたあと、爪あと、背こすりあと、フンなど
匂い 獣の匂い、動物の死体や血の匂いなど

クマ鈴や携帯ラジオで、賑やかに！人がいることを知らせよう。常に、人がいることをアピールしよう。藪の中に入る時は、特に要注意。

食事をとるときは見晴らしの良いところで。食べものや容器を捨てないで、必ず持ち帰ろう。

最重要！人間の食べ物の味を覚えさせない

ゴミの捨て方 生ゴミなどを放置しない。
家庭菜園やコンポスト 庭や畑に電気柵をつけるなどの対策をする。札幌市などには家庭菜園用電気柵の購入補助・貸出の制度があります。あなたの自治体はどうか、調べてみよう。



クマは学習してエスカレートする動物。人の食べ物は美味しい！人はそばにいても怖くない！！など学習すると、どんどん性質が変わってしまいます。



ペットや家畜の餌を外に置きっぱなしにしない。犬を襲うクマもいます。ペットの安全も確保しよう

裏山と畑や庭との間の草刈りをする。家の周辺の見通しをよくすることで、クマが近づきにくくなります。



近所に出たら 出没情報を知る

その3 「地域名、ヒグマ、出没情報」で検索してみよう。
北海道 市町村ヒグマ関連情報リンク集 - 環境生活部環境局自然環境課
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/joho.html>
こちらのサイトも参考になるよ！
北海道のヒグマ対策のHP
<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/higuma/kihon.html>
知床財団のヒグマ対処法 HP
<https://www.shiretoko.or.jp/library/bear/>
札幌市のヒグマ対策HP
<https://www.city.sapporo.jp/kurashi/animal/choju/kuma/index.html>



クマの生態について正しい知識を持とう。北海道入必読！おすすめはヒグマの会が作成した「ヒグマノート」クマの生態や万が一の時の対処の仕方がわかりやすく書かれています。



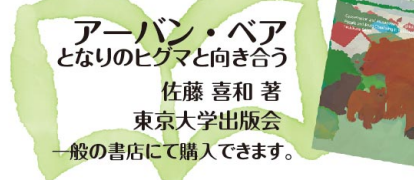
死んだふりはどうなの？
最悪の場合は死んだふりではなく、首の後ろとお腹を守る防御姿勢を。

身の危険、どう守るの？「出あわない」が最良の策、しかし出あってしまったら。止まれ・逃げるな・集まれ 絶対に走って逃げない



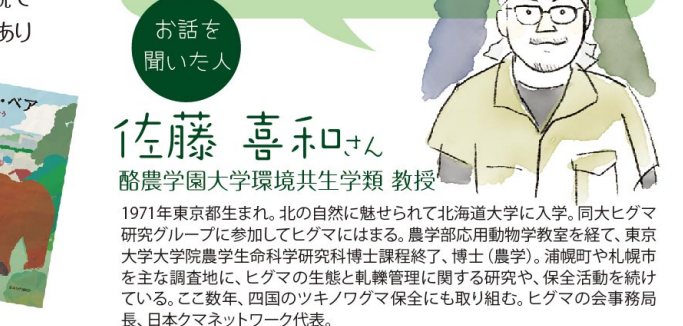
アーバン・ベアについて

森に接した住宅街や、森からつながる河畔林や水路や緑地などを伝って都市部にまでヒグマが出没するようになりました。都市周辺に生息し、都市の内部にまで出没する可能性のあるクマを「アーバン・ベア」と呼んでいます。「アーバン・ベア」の出現の背景には、減少していたヒグマが増加傾向にあり、分布範囲も拡大していることに加え、人と出会っても怖い経験をしたことがないヒグマが増えていること、みどり豊かな街づくりの結果、クマの生息地である森林と都市部をつなぐ河川や緑地がヒグマが移動できるコリドー（回廊）になったことなどがあります。街に入ってきてしまったヒグマについて、「駆除しないで、麻酔で眠らせて森へ返すことはできないの？」という声が寄せられます。しかし、ヒグマのような大型の動物を麻酔銃で眠らせるには、資格と高い技術を持つ専門家が30m以内に接近して発射する必要があります。また薬の効果が見れるまで数十分かかり、この間に興奮して市街地を走り回る可能性もあるため、事前に周辺住民や歩行者を避難させる必要があるなど、市街地での実施は現実的ではありません。



新田薫/エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけろ。クマはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
<http://etobunsha.com>

人とヒグマが共生していくことが理想ですが、同じ場所と一緒に暮らしていくことは難しい。だったら場所を分けて、ヒグマは森林の中で、人は人の生活圏の中でそれぞれ暮らすことを目指そう、というのが、となりのヒグマとのつきあい方。しかし、いったん人の生活圏に入ってしまったクマは、人間の安全な暮らしを守るために駆除せざるを得ないのが現実です。ヒグマが人の生活圏に迷い込んでしまわないように、人間がその境界線をクマに分かるように管理し、人の生活圏を守ることが、森林に暮らすクマを守ることに繋がります。



宮本尚/きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて買った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ、シンガーソングライター、宮本尚Song Gardenというバンドでライブハウスなどで時々演奏しています。
<http://kitanet.org>

森はどこにある

その森の中に立って見上げた時、小さくて軽やかなリズムを刻んでいるのを感じた。拍動に重なる様々な明るさや濃淡をもつ緑が、うねり渦巻き、何かにぶつかって、はじける。ああこれは海だ、森の香り満ちる緑の海。吹き込んでくる風がシャラン、しゃらんと愛らしい波音を立てて若草のなぎさを洗っている。

『垂直の庭』は山口市小郡の山陽新幹線が乗り入れる新山口駅の、南口と北口を結ぶ自由通路の壁を利用した庭園だ。両側の壁一面、天井のぎりぎりの際まで植物がぎっしりと生えている。草花か、せいぜい低灌木しかないが、森の下草を思わせる一見無秩序な景色が、そしてそこに立つ人をずっと上から見下ろしている緑のうねりが、私にとっては森そのものに見える。

この不思議な庭園は2015年に植物学者でもあるフランス人アーティスト、パトリック・ブランが地域住民の協力も得て制作したものである。壁のほとんど全面に貼り付けられた絨毯の小さなポケットに一つひとつ丁寧に植えられた草花と低灌木は、地元の森林から採取され(その数17000株)2年のあいだ大切に育てられてのち庭園に持ち込まれたそうだ。

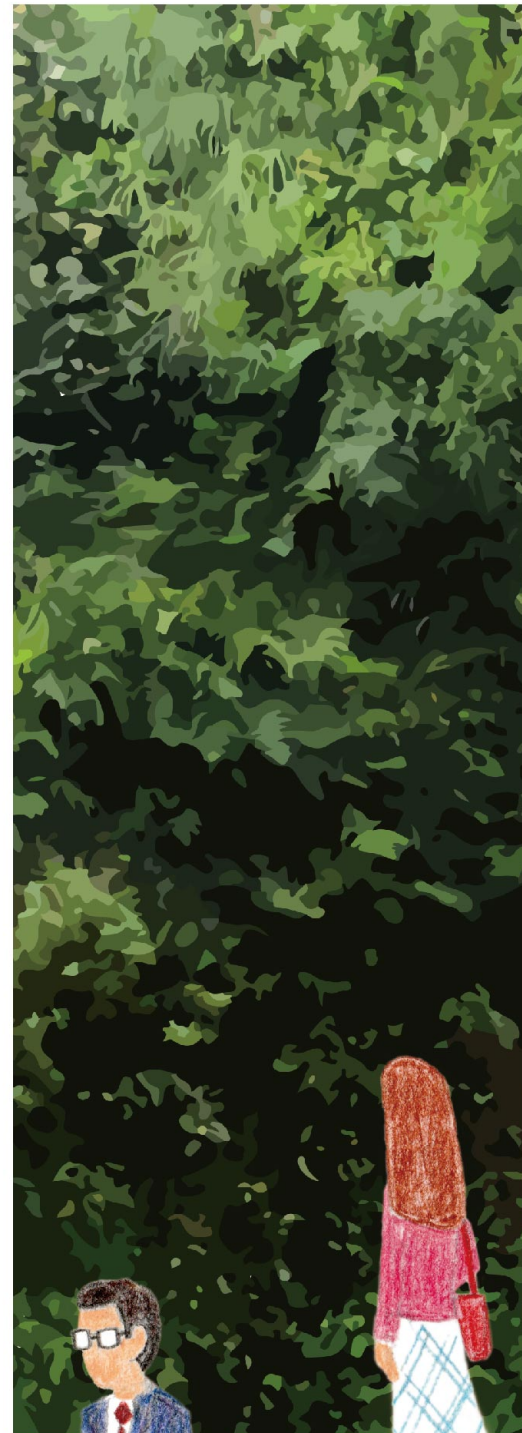
種類は140種余り。驚くことに植えられた全ての場所に番号がふられており、全ての植物が学術名とともにリストアップされている。だから、植物好きな人は無料パンフレットを片手に一つひとつ確認していくこともできる。140種の植物の名前を実物から教えてもらえる機会なんて、他にあるだろうか。それだけでもこの庭がどんなに丁寧に作られ、誠実に管理されてきたかが分かる。ハイテクの灌漑設備を持っていることは聞いていたが、人の手が関わる部分も多いのだろう。

私は二度、庭園を訪れている。一度目はできたばかりの頃。草木たちはまだ若くほっそりしていて、濡れたような翠の光に包まれていた。二度目、6年後に訪れた庭園は、変わらず私の目を楽しませてくれたが、最初の時の明い波打ち際のイメージとは少し違っていた。

低灌木のホソバイヌビワが褐灰色の幹を立ち上らせて存在感を示しているし、季節外れの花を付けている草があるのは、ここが冬のない植物たちの楽園だからだろうか。いずれもしっかりと根付いていて緑も濃い。今度は、アンリ・ルソーの絵にあるジャングルみたいな楽しい森。庭園の物語のページが一枚めくられて、ストーリーが進んでいく。

山口といえば、神社仏閣、美しい景勝地や鍾乳洞などの観光名所で知られている。わざわざ、駅の中にある小さな緑化空間のために足を運ぶ人はまれだろう。

でも、他にはない素敵な出会いを望むなら、いや、移動の間の暇つぶしでもいい。幸い庭園には気配りのベンチも用意されている。乗り物酔いが醒めるまで、少しの間休んでいくのもよい考えかも知れない。どうか、足を止めて庭園の住人になって欲しい。きっと、あなただけの物語に出会うことができるから。✿



text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『よいい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Report

あすもりの「未来」の役割を考える
あすもり
未来検討委員会

あすもりの活動が始まってから十余年、道内に10万本を超える樹を植えてきましたが、いわゆる「植樹」については植える場所の問題や各地区と自治体の協定の期間の関係などで終わりが見えてきました。でも、森づくりは息の長い活動です。植樹の次のあすもりの10年をどう考えていこうか、検討が始まりました。

2021年度は、道内で気鋭の森づくり活動をしている方々からインスピレーションを得てこれからのあすもりの大きな方向性を探る年になりました。協力いただいたのはout woodsの足立成亮さんといぶり自然学校の 上田 融さん。夏から秋にかけてお二人が手がける2つのフィールドを巡り、アイデアを出し合い、知恵を借りてあすもりが植樹の次に目指す活動のあり方を考えました。

出てきたキーワードが、森と暮らしを近づけたいね、ということ。私達も、足立さん、上田さんのお二人も強く感じていることが、「人と森との距離が遠い」という問題点。そこで、その距離を近づけて、人がいつも森に行ったり、森の物(木製品や林産物)がいつも人の暮らしにあたりする「森の文化」を定着させることが、これからの北海道の「森づくり」なのではないか、と考えたのです。もちろん、Fの森をはじめとするコープの森の森づくり(育林)など、実際の森づくりも考えていかねばなりません。これからの10年、あすもりは森と暮らしをつなぐことを大きな方針として活動を広げていく予定です。具体的な話はこれからですが、みなさんと次の森づくりの一步を進めることを楽しみにしています ✿



札幌南高校学校林にて (outwoods 足立さん)

苫小牧「和みの森」で 上田さんの話を聞く (いぶり自然学校)

あすもり未来検討委員会
2030年に向けた方向性
北海道の
森と暮らしをつなぐ活動を
ひろげていきます

Fの森から

コロナの影響もあってちょっと遠のいているFの森、次の季節に向けて、いろいろ進んでいます。

Fの森は植樹のスペースも埋まってきて、次の活動にシフトするタイミングを迎えているところです。変化がありそうなところをまとめてみました。

●植樹作業は組合員さんが主体に

これはFの森だけでなく、あすもりの森づくり全体の方針でもあるのですが、10年以上の時間をかけて植樹を進めてきたので、これからは次のステージに活動の主体を移したいと考えています。ただし、まだ若干の植樹のためのスペースがあるので、その部分については札幌東地区の組合員さんたちが植樹を担っていくことになりました。

●Fの森の看板がリニューアル

森づくりも進んできて、だんだんとFの森の様子も変わってきました。そこで、最新の情報を反映した新しい看板を、使い勝手の良い場所に移設することにしました。新しい看板は、今後の活動を見越して多くの人の目に留まりやすい場所を考え、あかえぞ口に設置されることになりました。次にFの森を訪れた時はぜひ新しい看板も見てみてください。

●ワークショップの幅も広がります

森づくりは植樹だけではなく、枝打ちや除草、除伐・間伐と、森になるまでに手をか



けてやらなければいけないことがたくさん。

Fの森では植樹は札幌東地区のみなさんに担っていただきますが、その他の森づくり(育林)作業についてはFの森ワークショップのメンバーにも力を発揮していただく機会になりそうです。また、森づくりだけではなく、もっと広い森との付き合い方も広げていければと考えています。これからもFの森と長い付き合いをお願いします。✿



早いもので今年でもう9年目。うまくいかなかったものもありますが、大きく生長している種類もたくさんあって、少しずつ「森」へと変化しはじめています(かなり鳥目ですけど)。そんな姿を皆さんに見てもらえるようにこれからもお手伝いをしていけたら、と思います。



苗木の準備や 森づくり全般を担当 雪印種苗(株) 木村 浩二

Event Report

円山の森と動物園のイキモノから、北海道の命と自然を考える

- コープ未来の森づくり基金&札幌市円山動物園 コラボ企画 -

どんぐりプロジェクト

プロジェクトのねらい

- ・円山動物園のどんぐりを育てて、森のなりたちを学びます。
- ・森の四季を体験し、森の豊かさ、いのちのつながり、ヒグマ、エゾシカ、オオワシ、カエルなど北海道の生物について学びます。
- ・生態系や種の保全に、動物園が果たす役割、市民ができることを考えます。
- ・自然との付き合い方を身につけた、環境保全を担う人を育成します。

札幌市円山動物園とあすもりのコラボレーション企画、「どんぐりプロジェクト」は、森づくりとともに生き物たちの「つながり」について子どもたちと学ぶ環境教育プログラムです。

もともとは円山動物園の敷地内で森林再生をしたい、という話があり、それならば子どもたちが環境について学ぶ場にしようとなりました。折しも円山動物園は、たくさんの動物たちや円山原始林、園内に生えるミズナラなど、この上ないコンテンツがこれでもかと詰まっている空間。そこで、どんぐりから動物たち、森づくりへとつながる環境教育プログラムの構想が生まれました。

たとえば鳥の糞の粘着質に包まれて冬の木の枝にぶら下がるヤドリギの種。子どもたちは、ヤドリギという植物が木々と鳥と密接なつながりの中で生きていることを、「動物園の森」を歩いて、動物園のボランティアや動物の専門家講師による案内で目の前のできごとの体験として学びます。また、動物園の動物たちのさまざまな姿、食性、生態を直接観察し、飼育員からの解説を聞き、多様な生存戦略と複雑なつながりに気

づいていく。そして拾い集めたどんぐりやその苗畑が生き物たちをつなぐキーワードになっていく...どんぐりプロジェクトはそんな活動です。

こうした環境教育は、実施したからといってすぐに環境問題が解決するような即効性のあるものではありません。人と生き物とのつながりへの気づきは多様性や他者への理解を促し、将来にあらゆる社会問題の解決策を探求する力になるはず。未来の大人をつくること、それは、森づくりと同じように重要な私たちの役目だと考えていて、このプロジェクトが設定した目標はそこにあるといえます。

どんぐりプロジェクトは2016年から始まり、新型コロナが影響をおよぼす2020年までのべ10回以上行われ、100人以上の子どもたちが参加してくれました。みんなで苗畑に植えたどんぐりはもう1m以上に育ち、移植を待っている状態です。参加した子どもたちも、これから大きく育って手から手へと、ゆたかな生き物たちのつながりであるこの地球環境を後世へとつないでいってくれることでしょう。



何か、見つけた？

どんぐり発見。どんな動物が食べるかな？



どんぐりの苗畑、1年目！



森にはいろんな生き物たち。



飼育員しか知らない動物たちのひみつ

Sponsors

2021年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々から支えられて運営しています。

赤城乳業株式会社 秋田いなふく米菓株式会社 株式会社あさの アサヒ飲料株式会社 アサヒグループ食品株式会社 アサヒビール株式会社 株式会社浅利佐助商店 株式会社アジア食品 味の素AGF株式会社 アスザックフーズ株式会社 株式会社天塩 イチビキ株式会社 五木食品株式会社 一正蒲鉾株式会社 イトウ製菓株式会社 伊藤食品株式会社 株式会社伊藤園 井村屋株式会社 岩下食品株式会社 株式会社宇治園 内堀製菓株式会社 ANAフーズ株式会社 エースコック株式会社 江口製菓株式会社 江崎グリコ株式会社 エスピー食品株式会社 エバラ食品工業株式会社 株式会社大塚村あきたこまち生産者協会 株式会社大森屋 株式会社岡田園 片岡物産株式会社 加藤製菓株式会社 株式会社加藤美峰園本舗 株式会社金市商店 株式会社カネカシーフーズ カネシメ食品株式会社 カバヤ食品株式会社 株式会社かまだ商店 上北農産加工株式会社 カルビー株式会社 カンロ株式会社 株式会社菊田食品 北日本食品販売株式会社 北日本フード株式会社 キッコーマン食品株式会社 キュービー株式会社 共立食品株式会社	キング醸造株式会社 金印物産株式会社 クラシエフーズ販売株式会社 コアレックス道栄株式会社 株式会社湖池屋 株式会社幸伸食品 株式会社幸田商店 合同酒類株式会社 国分北海道株式会社 国分グループ本社株式会社 小西酒造株式会社 株式会社坂口製粉所 株式会社ニッキバリ 札幌製菓工業株式会社 サッポロビール株式会社 サラヤ株式会社 沢の鶴株式会社 三幸製菓株式会社 サントリーフーズ株式会社 サンルコ食品株式会社 株式会社シー・ファーム 株式会社ジーエムピー シーインハラ株式会社 株式会社J-オイルミルズ 株式会社塩釜水産 ジャパンフrito株式会社 株式会社聖護院ハッ橋総本店 株式会社白子 株式会社新進 株式会社真誠 新得物産株式会社 スイートファクトリー株式会社 株式会社世界蔵小山家グループ 株式会社ソラチ 株式会社タイホク 株式会社タカキベーカーリー タカノフーズ株式会社 竹本油脂株式会社 竹山食品工業株式会社 株式会社種商 田村製菓工業株式会社 チヨウヤ梅酒株式会社 株式会社土倉 テーブルマーク株式会社 株式会社テンヨ武田 東海漬物株式会社 東京カリント株式会社 東北みやげ餅株式会社 東洋ナッツ食品株式会社	東洋水産株式会社 株式会社トキワ 株式会社戸田屋 株式会社ロッテ 中田食品株式会社 株式会社水谷園 株式会社七尾製菓 株式会社奈良コープ産業 ニコニコのり株式会社 株式会社ニチレイフーズ 日糧製パン株式会社 ニチレイフーズ株式会社 株式会社ニッキーフーズ 日清シスコ株式会社 日清オイログループ株式会社 日清食品株式会社 日清フーズ株式会社 株式会社ニッポン 日本ハム冷凍食品株式会社 日本ハムマーケティング株式会社 日本ルナ株式会社 ネスレ日本株式会社 株式会社ノースカラス ハーゲンダッツジャパン株式会社 ハイツ日本株式会社 ハウス食品株式会社 白鶴酒造株式会社 株式会社はくばく はごろもフーズ株式会社 ハナマルキ株式会社 富野漁業協同組合 ひかり味噌株式会社 日本ハムマーケティング株式会社 株式会社ヒロツク 福山醸造株式会社 フジフレッシュフーズ株式会社 伏見蒲鉾株式会社 フルク製菓株式会社 ブルドックソース株式会社 株式会社ブルボン ベストアメニティ株式会社 ベル食品株式会社 株式会社宝幸 株式会社ポールスタ ホクト株式会社 株式会社ホクリヨウ ホクレン農業協同組合連合会 株式会社北海道日水 北海道プリハム株式会社	北海道味の素株式会社 北海道キリンビバレッジ株式会社 北海道コカ・コーポドリンク株式会社 株式会社北海道日水 北海道はまなす食品株式会社 株式会社サッポロ北海道株式会社 株式会社ホクカン 株式会社塩川 北海道事業部 マルコ水産株式会社 マルコメ株式会社 株式会社丸善 丸善製茶株式会社 マルダイ味噌販売株式会社 マルトモ株式会社 株式会社マルナカ 丸永製菓株式会社 株式会社マルハニチロ北日本 マルハニチロ株式会社 三河屋製菓株式会社 株式会社Mizkan 株式会社みずさコーポレーション 三井農林株式会社 株式会社ミツハシ 三菱食品株式会社 有限会社みやげ食品 株式会社宮商 株式会社明治 森永乳業北海道株式会社 株式会社MON・CREVE 株式会社ヤクルト本社 ヤマキ株式会社 ヤマサ醤油株式会社 山崎製パン株式会社 株式会社大和谷食品 ヤマナカフーズ株式会社 株式会社山安 ユウキ食品株式会社 UCC上島珈琲株式会社 UHA味覚糖株式会社 雪印メグミルク株式会社 養命酒造株式会社 横井チョコレート株式会社 よつ葉乳業株式会社 楽岡食品株式会社 研研ビタミン株式会社 株式会社ロバパン 株式会社わかさや本舗
--	---	--	--

(順不同)

協賛企業に聞いてみた。
応援しています
コープの森づくり



よつ葉乳業株式会社

https://www.yotsuba.co.jp

よつ葉乳業は酪農家が搾った生乳を加工して牛乳、バター、チーズなどの乳製品を製造し、販売している会社で、北海道で生産される生乳の約2割を加工処理しています。そのため工場も規模が大きく、水や電力を多く使うので、目標値を定めてCO2の排出削減に取り組んだり、太陽光発電を取り入れたり、物流についても効率化を目指すなど、環境負荷を抑える取り組みを進めています。また、昨年からプラスチック削減のために学校給食に出される牛乳のストローを紙製のものに変更しました。

苫小牧にある「よつ葉の森」では社員のボランティアとその家族を集めて森づくりも行っていて、環境保全および社員の環境意識を高める教育的な取り組みにも力を入れています。

酪農は自然の産物です。水も土も空気も健全でないとよい牛乳は作れません。酪農を継続的に発展させることや、

よい牛乳・乳製品をお届けするために、自然を大切にしたい

と思っています。



よつ葉乳業株式会社 北海道支店 支店長 大場 克則さん

「どんぐりプロジェクト」
動画を作りました!

https://www.youtube.com/channel/UC-VNGFq_ghyVVn0m_rSG8RQ



公開中!

春編 雪解け一番 キーワードは「早起き」
夏編 豊かだけど命がけ

近日公開

秋編 森は実りの季節
冬編 雪の森と春待ついきもの

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.23」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？
右からそれぞれお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？ (はい・いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム (P2)
ひろがる、つながる、ころがる (P3~7)
木づかい (P8) 大きな木の小さな物語 (P9)
森のキモイ! キレイ? 特別編 (P10,11)
木育エッセイ (P12)
あすもりレポート (P13~15)



PRESENT!

アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「草の実工房もく」さんの動物パズルをプレゼントします。木のおもちゃでほっこりやさしいひとときをどうぞ。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。

応募締切 5/31(火) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局

〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-7575
メール: csapmori@sapporo.coop



こちらからもメールできます